

浄土教に於ける超越と内在の論理

岡 邦 俊

一 序

凡そ宗教の本質には二つの類型がある。一つには、内在が超越化するものであり、二つには超越が内在化するものである。前者は仏教がこれを代表し、後者はキリスト教がこれを代表すると云えよう。しかし、仏教の中にキリスト教と同じように、超越が内在化するもの如く思われるものがある。それは所謂浄土教系の仏教であり、特に浄土真宗に於てそうである。従つて、浄土真宗は一見してキリスト教と何ら異なるところなきほど類似している。しかし、よく検討してみれば、キリスト教と浄土真宗の間には根本的な相異点を見出すのである。それは、超越が内在化する点は全く両者は同一であるが、浄土真宗の場合では、内在化した後で再び超越化することである。

超越の一神が受肉してキリストとなり、十字架上に受難して犠牲となり、贖罪によつて人間の救済が成立する。超越の

内在化である。

こゝに注目すべきことは、たゞい超越が内在化しても、人間は所詮は神になれないと云うことである。

これに對比して、仏教では、人間が修道工夫し、戒定慧の三学を聞思修して、即ち、自己啓培によつて覚証し、解脱し、成仏する。内在の超越化である。しかし、浄土真宗にあつては、キリスト教と同じく、超越としてのアミダ仏が受肉して法蔵菩薩となり、願行具足して再びアミダ仏となり、その功德のありたけを名号に施し、これによつて人間を救うのである。救はれた人間は、次の段階では、この名号念仏の功德領受によつて、浄土に住生して涅槃の覚証を得るのである。超越が内在となり、更に内在化された人間は今一度超越となる。この超越によつて人間は完全に仏となるのである。

超越、内在、超越の過程を本稿は究明する。

二 超越が内在となる仕組―超越としてのアミダ仏

浄土教に於ける超越と内在の論理(岡)

「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」(行巻)
「正覚の阿弥陀不可思議にまします」(証巻)

「仏はこれ不可思議光如来、土はまたこれ無量光明土」(真仏土巻)
「この一。如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。

これを尽十方無碍光仏となづけたてまつるなり。この如来を南無不可思議光仏ともうすなり」(一多証文)
「しかれば仏について二種の法身まします。

ひとつには法性法身ともうす。ふたつには方便法身ともうす。法性法身ともうすは、いろもなし、かたちもましまさず、しかればこころもおよばず、ことばもたえたり、この一如よりかたちをあらわして方便法身ともうすその御すがたに法蔵比丘となりのりたまいて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらわしたもうなり」(唯信鈔文意)

以上は主として、浄土真宗の崇拜対象であるアミダ仏が、理性や論理を超えた超越的存在であることを明かにしたものである。このアミダ仏は、文字通り論理的思惟としての思議をはるか超越した存在であり、色もなく形もなきものである。このような超越のアミダ仏が人間に働きかけるためには、先づ第一段階としては、どうしても人間の姿形をした、人格としての法蔵比丘に受肉しなければならぬ。しかし、この法

蔵比丘は概念的に一応は人間の姿形として理解できるが、それ自身は方便法身であるから、本質としては人間を超越した存在でなければならぬ。法蔵菩薩が人間救済のために建立したと云はれる、四十八願もまた「不可思議の四十八の大誓願」と云はれる所以である。アミダ仏が超越であり、法蔵菩薩の本願が超越であることを今少し明かにしておきたい。

「弥陀、誓いを超発し」(教巻)

「弥陀の本願、特に超殊せり」(行巻)

「選択摂取の本願、超世希有の勝行」(行巻)

「横超の大誓願」(行巻)

「希有の大弘誓を超発し」(行巻)

「無上殊勝の願を超発し」(信巻)

「我れ超世の願を建て」(信巻)

「常倫を超出し」(大經上巻・行巻)

このように法蔵菩薩の本願、大誓願、大弘誓はすべて超発、超世、超出、横超であり超越の理によるものである。

さて、この超越、不可思議の四十八願の中の第十八願において完成された「念仏」「南無阿弥陀仏」「称名」「名号」によつて、いよいよ超越は内在化するのである。念仏、名号は不可思議、超越のアミダ仏が人間救済のために内在化するための具体的、人間化の姿形であつた。念仏、名号は人間に直接に働きかけることが出来るものである。この名号、称名、

念仏が完全に人間のものになる方途こそ信心であり、安心と云はれるものである。この信心、安心、否、称名、念仏が完全に人間のものとなる仕組こそ、浄土真宗に於ける特異の教である、「他力廻向」の論理なのである。

「他力と言うは如来の本願力なり」(行巻)

「真宗の教行証を案ずれば、如来大悲廻向の利益なり。故に若は因、若は果、一事として阿弥陀如来、清淨願心の廻向成就するところに非らざること有るなし」(証巻)

「ここを以て、如来、一切苦惱の衆生を悲愍して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなく、真実ならざることなし。如来清淨の真心を以て、円融無碍、不可思議、不可称、不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心を以て、一切煩惱、悪業、邪智の群生海に廻施したまえり」(信巻)

ここに云う「至徳」とは名号、念仏、称名の至徳であり、この全徳を名号に施して、人間に与へるものである。一般仏教におけるが如くに、人間より仏への廻向ではなく、全く逆に、仏より人間への廻向なのである。この全徳施名の称名、念仏を人間が受領した心理を信心と云い、安心と云うのであるが、宗学によればこの信心、安心さへも阿弥陀仏からの恵み、いただきものとされている。この名号受領の信心、安心によつて人間は救済を確認するのであるが、この確認の状態

浄土教に於ける超越と内在の論理(岡)

は「正定聚」「住不退転」「即得往生」と云はれている。正定聚とは字義の如く、いつ、どこで、どんな死に方をしても正しく浄土に往生することの定まつた聚(なにかま)に入つたことである。人間は生きている間に、現世でどうしてもこの正定聚に入らないと、死んでからの来世の浄土往生、必ず滅度に至ることは不可能とされている。この肉身の正定聚こそが、私は厳密な意味での「救済」であると思う。

三 内在が超越となる仕組

「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚に入るなり、正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る」(証巻)

「本願の名号は正定の業なり」(行巻)

「あらゆる衆生、その名号をききて、信心歓喜せんこと乃至一念せん、至心に廻向したまえりかの国に生ぜんと願すれば、すなわち往生をえ、不退転に住せん」(信巻)

「大願清淨の報土には品位階次をいわず、一念須臾の頃に速にとく無上正真道を超証す。故に横超という」

念仏の衆生は横超の金剛心をきわむるがゆえに、臨終一念の夕大槩涅槃を超証す」(信巻)

「偈に観彼世界相勝過三界道といえるがゆえに。これいかんが不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生ず

ることをうれば、三界の繋業畢竟してひかず。すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃をう、いづくんぞ思議すべきや」（証巻）

仏の根本的願いから恵まれた名号によつて、煩惱成就の凡夫は、現世で正定聚に住し、死後には滅度に至つて無上正真道を超証する。臨終の一念に於てすでに大涅槃を超証するのである。浄土に往生した者は往生と同時に「弥陀同体の悟り」をひらくと云はれている。救はれた者が死後、浄土に往生して「悟り」をひらくと云うことは、救はれた者への最大の恵みではあるが、この恵みは救済（人間）をはるか「超へた」覚証の世界であることを忘れてはならない。それは全く救済とは異質の「さとり」である。救済とは人間にかかはることであり、さとりは仏にかかはることであるから。この救はれた人間が完全に解脱し、覚悟し、成仏すると云う時点で、人間は再び超越化するのである。それは前にものべた如く、仏自体が超越者であることを思へば当然のことである。従来浄土真宗では、死後の浄土往生、従つて、往生即成仏までも救済として取扱つている。救済は現世の人間にかかはることであり、死後の往生即成仏以後は救済ではなく、覚証である。この点を今少し究明してみたい。

「大涅槃を証することは願力の廻向によりてなり」（証巻）

「速に疾く超えて、すなわち安樂國の世界に到るべし」（教巻）

「かくのごとく、悪人ただ十念によつて、すなわち超往をう、あ

に難信にあらずや」（信巻）

「一念須臾のあいだ、速に疾く無上正真道を超証するが故に」

（信巻）

「必ず大涅槃を超証すべし」（信巻）

「人天に超過せり」（信巻）

「往生はすなわち難思議往生なり」（行巻）

「この信行によつて、必ず大涅槃を超証するが故に、真仏弟子と
いう」（信巻）

「かの仏國はすなわちこれ畢竟成仏の道路、無上の方便なり」
（証巻）

往生とは大涅槃を超証することであり、超往であり、難思議往生であり、無上正真道を超証することである。浄土真宗は世に云う「救済教」ではなくて、究極的には仏教の通義である「覚証教」であり、「解脱教」であることが明かとなる。浄土真宗の最終の目標、理想は浄土に於てさとり仏になることである。

更に、浄土真宗では往生成仏者は還相廻向の恵みによつて人間界に還来し、利他教化地の活動に入る。こゝで再び超越の内社化が行はれるのである。超越、内在、超越、内在の円環こそ浄土真宗の宗風と云へよう。